作品概略

- ✓ G.ヴェルディ(1813～1901)の作曲したオペラ全28作品のうちの第20作目
- ✓ パリ・オペラ座のために作曲した最初の新作オペラ
- ✓ スクリーブとその協力者の合作による台本に基づく全5幕のグランド・オペラ
- ✓ 作曲:1854年1月～10月
- ✓ 初演:1855年6月13日、続いて40回上演
- ✓ イタリア初演:1855年12月26日(パルマ、トリノ)→1856年2月4日(ミラノ)

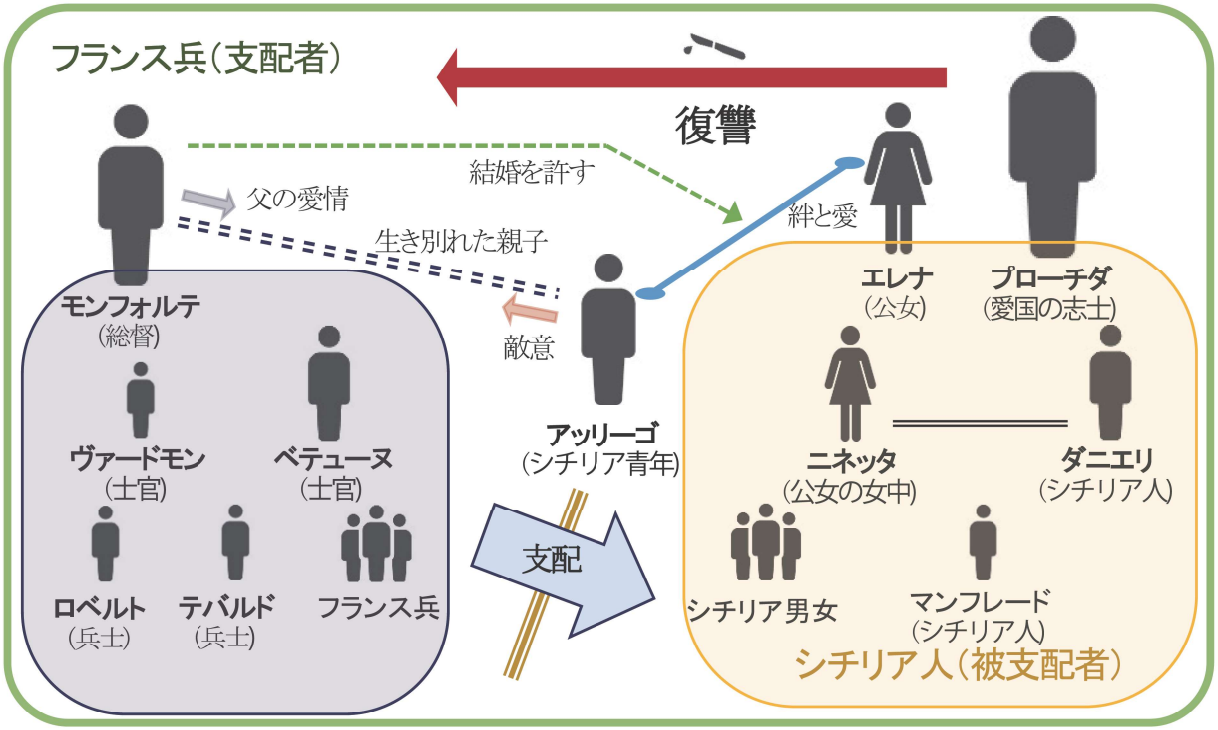
史実:「シチリアの晩鐘」事件とは？

シチリア島でフランスのアンジュー家のシャルルの支配に対して起こった反乱。1282年3月30日、復活祭の月曜日の夕方、パレルモの教会の前には大勢の市民が晩祷(夕刻の祈り)を行うため集まっていた。アンジュー家の兵の一団がパレルモでシチリア住民の女性に暴行したことに怒った住民が暴徒化した。

激怒した住民は「フランス人に死を！」の叫びをあげて襲いかかった。ちょうどそのとき、晩祷を告げる鐘が鳴ったことから「シチリアの晩祷(晩鐘)」と称されるようになった。暴動は瞬く間にシチリア全土に拡大し、4000人ものフランス系の住民が虐殺された。

当時シチリア王国は、ホーエンシュタウフェン家を断絶させたフランス王族であるアンジュー家のシャルル・ダンジューが支配しており、住民の間には不満が鬱積していた。住民から強引な食料や家畜の調達などを行い、これが住民の反発を更に強めたといわれる。

人物関係図



【シチリア】

エレナ：オーストリアのフレデリック侯爵（フェデリーコ）の妹（ソプラノ）
アッリーゴ：シチリアの青年（実はモンフォルテの息子）（テノール）
プローチダ：シチリアの医師（実在の人物）（バス）
ニネッタ：エレナ公女の女中（メゾソプラノ）
ダニエリ：シチリア人（ニネッタと婚約）（テノール）
マンフレード：シチリア人（テノール）

【フランス】

モンフォルテ：ナポリ国王シャルル・ダンジューに仕えるシチリア総督（バリトン）
ベテューヌ卿：フランス軍の士官（バス）
ヴァードモン伯爵：フランス軍の士官（バス）
テバルド：フランス軍の兵士（テノール）
ロベルト：フランス軍の兵士（バリトン）

ドラマのあらすじ

シチリアを支配するフランス兵が兵営の前で酒を飲みながら楽しんでいる。シチリア人たちは彼らの行動に不満を抱いている。

ニネッタとダニエリに付き添われたエレナ公女が喪服に身を包んで登場し、シチリア人たちから敬愛をこめた挨拶を受ける。兄である前シチリア王フェデリーコの死後、人質となっているエレナは、亡き兄の冥福を祈りながら、心ひそかにフランスへの復讐を誓う。ロベルトに歌を強要されたエレナは、シチリア人たちを鼓舞し、反抗心が高まる。

そこへ総督モンフォルテが現れ、圧倒的な権威により、場の雰囲気が一変する。シチリア人たちは怖気づき、反乱の気運は抑制される。

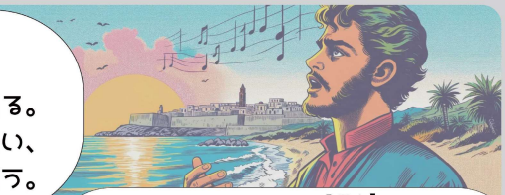
青年アッリーゴがエレナのそばに駆け寄り、再会を喜びあう。裁判で無罪を言い渡され、放免されたばかりであった。情熱にみちた言葉を頼もしげに聞いていたモンフォルテは、アッリーゴに興味を示し、彼の身元を問う。

モンフォルテはアッリーゴに、エレナの宮殿を避けるよう警告するが、アッリーゴはこの警告を無視し、エレナの宮殿へ向かう。

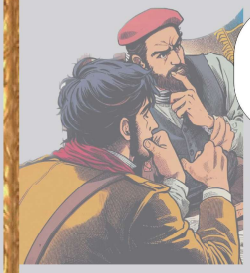
第2幕：パレルモ近郊の谷間

1.プローチダの帰還

- プローチダが長い亡命生活からシチリアに戻る。
- 「おお、パレルモ」のアリアを歌い、祖国の自由を願う。



2. 反乱の計画



- プローチダは
マンフレードとその仲間たちに
反乱を計画するよう告げる。

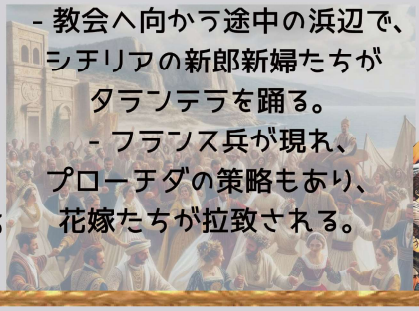
3. エレナとアッリーゴの感情の深まり

- エレナとアッリーゴが会い、アッリーゴはエレナに対する愛情を表現する。

4.モンフォルテの招待

- ベテューヌ卿が舞踏会の招待状を渡し、アッリーゴはこれを拒否するが、強制的に連れて行かれる。

5. タランテラの祝祭



- 教会へ向かう途中の浜辺で、シチリアの新郎新婦たちがタランテラを踊る。
- フランス兵が現れ、プローチダの策略もあり、花嫁たちが拉致される。

6. 反乱の火種

- 花嫁たちの拉致をきっかけに、シチリア人たちの怒りが爆発し、反乱への気運が高まる。

永らく祖国を離れて亡命していたプローチダが小舟から上陸し、久しぶりに祖国の土を踏んで感激に浸る。

部下のマンフレードらは、彼の帰国を同志たちに知らせに向かう。エレナとアッリーゴが通りかかり、思いがけない再会を喜びあう。

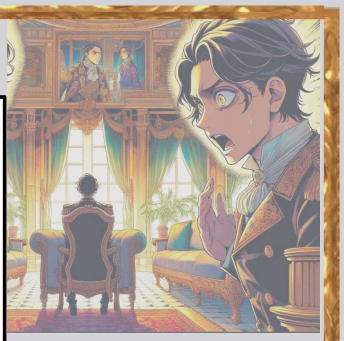
エレナに想いを寄せるアッリーゴは彼女への愛情を表現するも、エレナは亡き兄の復讐を果たすことを願う。

ベテューヌ卿がモンフォルテからアッリーゴへの舞踏会への招待状を手渡す。アッリーゴはこれを拒否するが、強制的に連れて行かれる。

教会へ向かう途中の浜辺で、シチリア人の新郎新婦たちがタランテラを踊る。フランス兵が現れ、プローチダの策略もあり、花嫁たちが拉致される。

シチリア人たちはフランス人への復讐の誓いを新たにする。そのとき、海に浮かぶ船の上から、フランス人たちの優雅な歌声が聞こえてくる。

第3幕：モンフォルテの宮殿



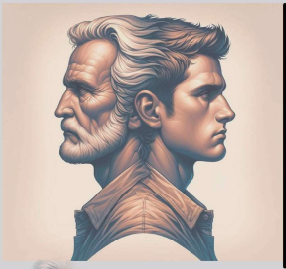
1. モンフォルテの心のうちとアッリーゴとの対面

- モンフォルテは、アッリーゴが自分の息子であることを知る。
- アッリーゴは衝撃を受けながらも反抗的な態度を見せる。

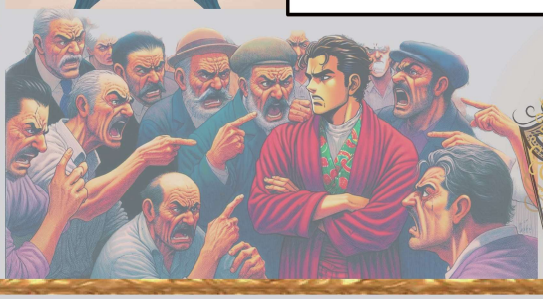
2. 舞踏会と暗殺計画

- 舞踏会が開催され、バレエ《四季》が上演される。

3. 父の救出とアッリーゴの葛藤



-エレナ、プローチダが暗殺計画を進める
-アッリーゴは父モンフォルテを暗殺者から守るために飛び出し、シチリア人たちから裏切り者と見なされる。



モンフォルテは、部屋で物思いにふけっている。モンフォルテを憎みながら死んでいったアッリーゴの母の遺書には、アッリーゴがモンフォルテの息子であることが記されていた。ベテューヌ卿に連行され、アッリーゴが入ってくる。アッリーゴは敵意と憎悪に燃えながらも、自分に対する丁重な扱いを不審に思う。だが、モンフォルテから母の手紙を示され、モンフォルテが自分の父と知り、当惑と恥辱の念に襲われる。モンフォルテはアッリーゴに、自分を父として受け入れることを望むが、アッリーゴは、反抗的な態度を見せる。

宮殿内の大広間で華やかな舞踏会が開催され、バレエ《四季》が上演される。

祝宴が始まり、エレナとプローチダが登場する。アッリーゴはエレナが来たことに驚く。お互いの目印のために、胸に青いリボンを付ける。アッリーゴは、モンフォルテの身に危険が迫っていることを察知し、父に立ち去るよう嘆願するが、モンフォルテは聞き入れず、逆にアッリーゴの胸につけられた青いリボンを引きちぎる。そのとき、シチリア人たちが取り囲み、エレナが短剣を振るうも、アッリーゴが飛び出し、これを阻止する。モンフォルテは、アッリーゴ以外の反逆者たちを捕縛する。シチリア人たちは、アッリーゴがモンフォルテを守ったことに驚くとともに、裏切者と非難する。

ヴェルディ　シチリアの晩鐘

バレエ《四季》

冬

ヤヌスが黄金の鍵で大地を開き、季節に命を与える。
氷で覆われたバスケットがあらわれ、そこから一年の最初の季節冬が出てくる。
若い女性の形態をしていて、毛皮に包まれている。
荷物をかかえた3人の女性が入っている。彼女たちは寒さに震えている。

女性達の一人が鉄のかけらで石を打つと、火花が出る。火がともったのである。
娘達は暖まり、冬に彼女たちの方にやってくるように誘う。
冬はそれを拒絶する。暖かさを取る最良の方法は踊ることである。

春

春風が氷で覆われたバスケットの周りを羽ばたく。
そしてその熱量で、まだ覆われたままの氷を溶かしはじめる。
あらゆる場所から花々の束が現れ、
それらの真ん中に女性の形をした春が現れる。

夏

花々は消える。バスケットは黄金色の麦の穂に再び包み込まれる。
夏が、女性の形で束ねた麦の穂の間から出現する。麦の穂は摘み取られる。

夏と彼女の仲間たちは踊りたいのだが、余りにも暑い。
暑さが彼女たちに重くのしかかる。

若いナイアスたちが、バスケットから緑色の長いヴェールの
ショールを身につけて出て来る。
彼女たちは水を模倣しているのである。夏と彼女の仲間たちは
泳ぐ真似をする。一人の娘が水浴びをしたくなる。

秋

一人の女性が登場。
娘たちの驚き。牧神ファウヌスの驚愕。
若い娘達は逃げ去り、ファウヌスは後を追う。
遠くの方で陽気な響きが聞こえてくる。
ファウヌスは注意深く聞きいる。
バスケットは果物とブドウで覆われる。
ファウヌスはその周りを何度も周り、最後にその上に登る。
彼がブドウを潰すと、秋とその仲間達が現れる。驚愕。

第4幕：城内の中庭

1. アッリーゴの苦悩

- アッリーゴは獄中のエレナとプローチダに想いを寄せ、悲痛なアリアを歌う。

2.エレナとの再会

- エレナとアッリーゴが再会し、アッリーゴはモンフォルテが自分の父親であることをエレナに告白。

3. プローチダの計画の露見

- プローチダがエレナにスペインが反乱を支援するとの情報を伝えるが、モンフォルテが現れてエレナとプローチダたちの処刑を命じる。

4.アッリーゴの懇願と赦免

- アッリーゴは友人たちのために慈悲を乞い、モンフォルテは彼に自分を「父」と呼ぶことを求める。
- モンフォルテは最終的にエレナとアッリーゴの結婚を認め、シチリア人たちへ赦免を宣言する。

アッリーゴは、反逆罪で幽閉されているシチリア人たちを訪ねる許可証をもって現れる。獄中のエレナとプローチダに想いを寄せ、悲痛なアリアを歌う。

連れて来られたエレナは、アッリーゴの嘆願を聞こうとせず、怒りと軽蔑の言葉を投げつける。しかし、モンフォルテが彼の父であることを聞かされたエレナは、彼の呪われた宿命に同情し、彼を許す気になる。二人は改めてお互いの真心を確認しあう。

連行されてきたプローチダは、スペインから援軍が来ているという情報をエレナに告げ、アッリーゴを罵る。アッリーゴがモンフォルテの息子であると聞いても、プローチダの怒りと絶望は激しくなるばかり。一方、修道僧たちの祈りの歌声が聞こえ、処刑の準備が整う。

アッリーゴはシチリア人のための慈悲を乞い、モンフォルテは彼に自分を「父」と呼ぶことを求める。アッリーゴは苦悶するが、斬首が迫り、たまらず「父」と叫ぶ。モンフォルテは刑の執行の中止と反逆者たちの釈放を命じ、かつフランスとシチリアの和解の印として、アッリーゴとエレナの結婚を認める。

第5幕：モンフォルテの宮殿の庭園

1. 結婚式の準備

- エレナとアッリーゴの結婚式の準備が進む中、エレナは感謝の気持ちを表す。

2. プローチダの最終計画

- プローチダは、結婚式の鐘の音を合図にフランス人を虐殺する計画を明かす。

3. エレナの葛藤と決断

- エレナは愛と義務の間で引き裂かれるが、最終的にアッリーゴとの結婚を拒否する。

4. 結婚式と反乱の勃発

- モンフォルテがエレナとアッリーゴを結婚させ、鐘が鳴り、シチリア人たちが反乱を起こす。

アッリーゴとエレナの結婚式の準備が進む中、エレナは感謝の挨拶をする。アッリーゴとエレナは、改めてお互いに永遠の愛を誓いあう。

プローチダがエレナに近づき、結婚式の始まりを告げる晩鐘の音を合図に、シチリア人がいっせいに反乱に立ち上がり、フランス人を虐殺する計画であることを告げる。

エレナは驚きのあまり、アッリーゴの言葉に何と答えてよいかわからない。愛と義務の間で引き裂かれるが、最終的にアッリーゴとの結婚を拒否する。アッリーゴは、エレナが愛を欺き裏切ったと信じて激怒する。

モンフォルテは、耳を貸すことなく、強引にエレナとアッリーゴの手をとって、二人を結びあわせる。鐘が鳴り、エレナが顔色を変えた瞬間、シチリア人が叫びをあげてなだれこみ、フランス人を皆殺しにする。

演出ノート

木澤 譲

大学生の時、ヴェルディの音楽に魅了され、CDを買い漁り、イタリア語の辞書を手に入れました。バレエダンサーとして活動を始め、藤原歌劇団の「椿姫」に数回助演で参加し、東京大学歌劇団で「アイーダ」にも出演しました。さらに、イタリア語の電子辞書を購入し、NYに行ってイタリア系の教会でイタリア語を学び、イタリアンコミュニティで生活しました。　そして、日本に戻り、ここ15年間ヴェルディの演出に取り組んできました。

《シチリアの晩鐘》といえば、マリア・カラスの唯一の演出作品であり、エレナの第4幕のアリア「Arrigo! ah! parli a un core」を夜な夜な聴いていたことを思い出します。日本のバレエレッスンでは一度も使われたことがなかったこのオペラの曲が、NYでは度々レッスン曲として流れていたことに、認知度の差を感じました。

この一年間、プランを練るにあたり、複雑な筋立てや各登場人物の感情の多様性に苦労しましたが、その過程で得た洞察や工夫について、以下に記します。

筋を追うにつれて、理解が増すにつれて、各登場人物が生身の人間というよりは、大理石でできた彫像のように描かれているという認識を得ました。これは世話物というよりは、時代物のオペラなのです。

歴史的絵巻として描きたいという思いから、舞台セットは源氏物語絵巻等で大きな役割を果たしている金色の雲や霞にインスパイアされ、シンプルな雲を用いました。これは時の流れや各登場人物のクローズアップを狙ったものです。

上演回数が少ないオペラということで（何と私たちが東京初演！）、総譜やリブレットに書かれているト書きを基本的に忠実に再現することを意識しました。

また、ヴェルディのバレエ《四季》は素晴らしい名曲であり（私も現役時に踊れる機会をうかがっていましたが、叶いませんでした…）、このオペラのキーとなる二つの顔を持つヤーヌス神から、クラシックバレエとコンテンポラリーダンスが交錯する構成としました。

衣裳はシチリア島の歴史を俯瞰してみて、観客に新たなるイメージを持っていただくために、フランスとシチリアの違いを描くために、イスラム文化の香りを加味してみました。

各登場人物の多面性が、ストーリーを追うことに困難を与えるかもしれませんが、キャラクターの深みが増し、観客により豊かな体験を提供できることを願っています。

バレエ《四季》振付ノート

能美 健志

【冬】ヤーヌス神　→　冬の扉を開ける。
寒気、火、雪、北風、白、寒暖。
ヤーヌス神の分身　→　春を導く。

【春】女性、生まれる、芽吹く、花（桜）、揺らぎ、飛散。

【夏】少女、セクシャリティー、キャラバン、アラビア、暑さ、渇き、生死、水、泳ぐ、循環。

【秋】飛翔、牧神ファウヌス。
豊作、収穫（実り）、男女、二元性、三、三位一体、安定、調和（天と地）、統合。

■作曲当時の時代背景

「シチリアの晩鐘」事件（1282年）は、ローマ教皇の息のかかったフランス支配から脱却し、ノルマン人がもたらした過去の栄光を取り戻すという大義のもとに計画・遂行されましたが、事件後はアラゴン・スペイン支配下の長い暗黒時代に帰結しました。本作品の最終場面の音楽的な唐突さと空虚さは、「シチリアの晩鐘」という事件が成功裏に終わらなかったことを示唆します。

本作品が初演された19世紀半ばのフランスは、まさに動乱の時代。フランス革命を経て、国家体制は、短期間のうちに、オルレアン七月王政（1830年）、二月革命による第二共和制（1848年）、ナポレオン三世による第二帝政（1852年）へと移行します。グランド・オペラの黄金期は、上層ブルジョアジーが支配権力を握ったオルレアン七月王政、ルイ・フィリップの治世にぴったりと重なっており、第二共和制から第二帝政へと移行していく中で、上層ブルジョアジーに属する人々が「シチリアの晩鐘」事件におけるシチリア人たちに自らを重ねて共感したことは容易に想像できます。

一方、イタリアに目を向けると、ナポレオン失墜後に成立した両シチリア王国は、ナポリからの分離独立を要求しましたが、イタリア本土では、オーストリアからの独立とイタリアの統一運動、すなわちリソルジメント運動が高揚していました。本作品がイタリア初演されたパルマ、トリノ、ミラノは、いずれも北イタリアの主要都市であり、オーストリアから独立し、イタリア人としてのアイデンティティの確立を目指す動きと親和性があります。オペラ《シチリアの晩鐘》は、こうした時代背景のもと、人々に強く支持されたと推察されます。

■オペラ《シチリアの晩鐘》の音楽的特徴

本作品は、40歳前後のヴェルディの二つの様式の間の橋渡しの役目を果たしており、具体的には、これまでに獲得した技法の集成と、フランス・オペラの影響と、新しい表現への試みとの3つの特徴を合わせもつ「三面のヤーヌス」的な作品と評されますが、楽譜を紐解くと、史実や人間社会に対するヴェルディの深い洞察が窺われます。

現代でこそ、人々は多くの選択肢を持ち、自由な意思決定が可能になりましたが、中世において、人生は生来的に運命づけられていました。各々の身分や属性を前提に、厳格な規律のもとで生きるのみ。人々は与えられた責務と向き合いますが、あるときは無意識に非道な行いに及び、あるときは自らの秘めた内面との矛盾に気づき苦悩します。

本作品において、ヴェルディは、メロドラマの要素を持ち込まず、格調高い歴史劇として仕立てました。上級社会における支配者と被支配者という構図が強く打ち出された本作品において、一瞬垣間見られる個々の登場人物の内面の吐露は、人間の生き様を印象的に映し出します。

また、「シチリアの晩鐘」事件は、外国支配からの脱却における理念と実際の違いを後世に突き付けるものであり、オペラ《シチリアの晩鐘》では、忠誠と裏切りの狭間で揺れ動く登場人物の関係性がドラマとして描かれていますが、これらは、「理想」と「現実」の相違という共通の対立軸の中で読み解くことが可能です。すなわち、本作品では、理想は幻想であり現実とは異なるという人間社会の不実の真理が、音楽的な響きのパレットの巧みな選択によって、意識的に浮き彫りにされています。

具体的には、「現実」に対しては、♯や♭の少ない明晰な響きが用いられるのに対し、「理想」に対しては、♯や♭の多いくすんだ響きが用いられています。絆と愛情によって結ばれたエレナとアッリーゴは、血縁の違いゆえに現世での連帯を諦めます。プローチダの抱く祖国奪還の希望も、モンフォルテが欲する親子の愛情も、すべて幻にすぎません。これらの「理想」が全て、いわばイタリア語における遠過去のように、「現実」から切り離されたトーンで一貫して作曲されているところに、ヴェルディの解釈の深さを感じずにはいられません。